

ルネ・ジラール著，古田幸男訳

## 暴力と聖なるもの

1982年，法政大学出版局

605+5頁

島 蘭 進

「人は何のために宗教を信じるのか」、「人間はなぜ宗教を信じてきたのか」という問いは答えることができぬものなのだろうか。現代の宗教学においては、答えるのが容易でないばかりでなく、ほとんど不可能とさえ考えられているかもしれない。かつていくつかの答えが出されてきたが、どれも十分に人を納得させるに至っていない。個々の資料をふまえた着実な実証研究だけに意義があるという科学者の実感があり、その背後にはそもそもこういう問いは、答え得ぬものへの無謀な問いだという考え方があろう。しかし、宗教についてのさまざまな問いかけの底には、いつもこの問いが潜んでいるのではなからうか。

本書はこの問いに正面から答えようとしたものである。宗教の本質、起源、機能は何かという問題に、単純明快な一つの答えを提示しようとしているのである。この大胆な試みは、著者の思想形成の主たる基盤である文学と文芸批評の領域で尊ばれる「直観」によって導かれている。しかし、著者は、本書で提示される諸命題を科学的仮説と見なし、実証的な検証の可能なものとも考えている(511~513ページ)。実際、やや難解な文学的レトリックの背後にある考え方には、20世紀初頭の科学的宗教理論の巨匠たち、とくにデュルケムとフロイトのそれを思わせるものが少なくない。しかも著者の理論は、実証主義やら精神分析やら構造主義やら、その他

もろもろの「主義」のもっている「宗教性」の批判を目ざしているという点で、きわめて現代的である。本書は科学的宗教理論史上の重要な業績として検討に値すると思うのである。

まず、本書の論旨を私なりにまとめよう。

(1) 暴力の本質と供犠の機能(第一章「供犠」)——暴力への欲求がひとたびかきたてられると、それを鎮静化するのは困難である。最初にねらった相手が遠ざかってしまうと、暴力は身代りの犠牲を探し求め、なんなくそれを見つけ出す。また、暴力は伝染する。暴力の状況にひきこまれた人は、暴力に加担せざるをえない。暴力は力ある者が一方的にふるうものでなく、他方がそれを増幅せざるをえないような相互的なものである。暴力の展開に抗しようとする人々でさえ、模倣効果によってかえって暴力があれ狂うのを助長してしまう。暴力の影響下では、そもそも欲望すべてが暴力に支配される。相手に勝とうとすることが、相手の欲望する対象への欲望を生み出すのだ(225~248ページ)。かくして、抑制機構のない集団内でいったん暴力の火がつけられると、無限の連鎖をひきおこし、集団は絶滅の危機に瀕するおそれがある。実際、ブラジルのカインギャング族でそれに近い「社会的自殺」の事態が生じたことが報告されている(85~89ページ)。

こうした暴力の脅威に対する予防措置としての機能を

果たすのが供犠である。「供犠の機能は、内部の諸暴力を鎮静化し、諸葛藤の爆発を妨げることである」(23ページ)。供犠は、身代りを求める暴力の性質を利用して、人々の相互的暴力の鋒先をそらし、暴力をいけにえ(保護したいと望む社会成員と相対的に無関係な生き物)の上に集中させる。そうすることによって、(リーンハートのディンカ族研究やターナーのヌデンブ族研究が主張するように)供犠は社会の統合と秩序を維持する。文明社会では、供犠のかわりに強大な国家権力を背景にした法体系が、内部の暴力を鎮静化する。これは暴力に対する治療手段である。家族の一員を犠牲にさし出して報復の連鎖を終結させるというチュクチ族の場合は、供犠がこの治療手段に近い形で現われている。

(2) 供犠の危機と神話・儀礼(第二章「供犠の危機」)——状況が変化するとき、供犠がその変化についていけず、元来の機能を果たしえなくなる事態が「供犠の危機」とよばれる。すなわち、供犠が暴力を統御しきれなくなるのである。身代りの犠牲に向けられるべきヘーラクレースの暴力があふれ出して家族にも及んでしまうことを描いたエウリーピデースの悲劇は、この供犠の危機を描いている。実は、一般に悲劇の本質的性格は、供犠の危機をあばき出し、そのことによって供犠の有効性をさらに浸食していくところにある。この悲劇的な知は、ギリシア悲劇のみならず、前ソクラテス派や旧約の預言者にも見られる。悲劇の典型的主題は二人の主役の葛藤であり、両者がたがいに優位を争いながら、結局、差異を失っていくところに現れる。これは暴力の相互性が、あらゆる文化的秩序、とくに神話と儀礼をなしたてている差異の体系を浸食していく「非差異化」を表現するものである。双生児は非差異化を象徴するものとして忌避されるが、そのような象徴体系を作ることによって神話は差異を生み出し、供犠の危機を隠蔽する。「供犠の危機」という概念を通して、著者は供犠の問題を一挙に文化体系全体の問題に拡大する。安定の時代においては神話(と儀礼)が精製され、危機の時代にはそれらが解体され暴力的非差異化が生じ、悲劇はそれをあらわにし、さらにつき進める。この循環のメカニズムはどのようなものなのか、供犠の危機の最終段階でいかにして差異の体系が再構築されるのかという問いが、根源的な問いとして設定される。

(3) 神話と儀礼の発生(第三章「オイディプスと贖罪のいけにえ」)——この問いを解く鍵が、オイディプスをめぐる悲劇と神話に求められる。ソボクレースの悲劇『オイディプス王』は、テーバイの災厄の原因をオイディプス一人の怒りに帰していない。オイディプスの暴力の前には、父ラーイオスの子殺しの企てがあった。そして悲劇の進行とともに、オイディプス、テ

イレシアース、クレオーンの三者が同等に暴力の内部にまきこまれ、破局へと導かれていく。暴力の深まりと文化秩序の破壊の責めはオイディプス一人に帰せられるのではなく、万人がこれに関与している、とソボクレースは見ている。これに対してオイディプス神話は、オイディプス一人に責めを帰す。すなわち、彼の父殺しと近親相姦を災厄の原因と見なす。父殺しと近親相姦は差異の消滅の典型的ではあるが一つの表現にすぎないのに、神話はそれだけを孤立化させることで差異の体系を構築する。このようにオイディプスが「贖罪のいけにえ」となる過程、万人の暴力がただ一人に背負わされるという過程に、文化秩序の成立、回復の核心がある。この過程は、非差異化の終局において万人がすべて同等となった時に生じる、理由のない不可思議な意見の一致に基づく「創始的暴力」、あるいは「暴力の満場一致」によってもたらされる。このことが忘却され隠されているために、人々はオイディプス一人の有罪性を信じていることができるのである。贖罪のいけにえはさし当り呪われたものであるが、やがて『コロノスのオイディプス王』に表現されるように救い主という姿をとり始める。暴力の満場一致のメカニズムが見定められないので、平和への奇跡的転換の理由をも贖罪のいけにえ自身に求めるのである。贖罪のいけにえのこの二面性は現(近代的思考にとっては矛盾だが、暴力の恐ろしさを秘かに知る宗教的思考にとってはそうではない。以上のようなオイディプス王の物語の解釈から、著者は、相互的暴力から満場一致の暴力への転換、すなわち贖罪のいけにえの殺害が原初の人類に実際に起こったとし、民族学者が観察する供犠の中に、この原初の出来事を彷彿させるものがふんだんに見られるという(第四章「神話と儀礼の発生」)。そしてさらに、この原初の出来事が供犠のみならず、あらゆる神話、儀礼、宗教的なものの起源をなした、という仮説を設定する。

(4) 宗教的なもの——以上の仮説は決定的な証拠によって立証することができないので、さまざまな傍証があげられ、それらを通して、宗教的なものについての著者の見方が明らかにされていく。たとえば、良きものであると同時に悪きものであるという聖なるものの二面性は、相互的暴力と満場一致の暴力が重ね合わされて共同体の外部に移動されたものである(第十章「神々、死者、聖なるもの、供犠における身代り」)。ターナーが差異の消滅をその特徴とするところの祭における喜ばしきものは、実は創始的暴力に先だつ相互的暴力が、前者の良き性格を背負わされたものだ。エウリーピデースの『バツカイ』が示すとおり、ディオニューソスとは暴力の化身である(第五章「ディオニューソス」)。怪物、憑依、仮面といった現象は、相互的暴力の進行の中で同等とな

り、たがいに分身となりゆく人々が垣間見る優者／劣者の重ね合わせ像＝「畸型の分身」に由来する(第六章「模倣の欲望から畸型の分身へ」)、等々。さらに宗教にとどまらず、悲劇、法体系、君主制も原初の贖罪のいけにえのメカニズムを反映するものだ、と論じられる(第十一章「儀礼的なものの単一性」)。これらの議論はどれも、現象の一面だけをとりあげたものであって、十分に説得力あるものとはいえないかもしれない。しかし、全体にわたって織り込まれている「宗教的なもの」「宗教的思考」についての著者の指摘は、たいへん鋭いものを持っている。宗教的思考は相互的暴力から満場一致の暴力への転換という贖罪のいけにえのメカニズムをけっして知ろうとしない。この忘却、誤認によって宗教的なものは、人々を暴力から守る。宗教的思考は暴力の作用を鋭敏に感じ取っているが、それを知的に理解しようとはしない。これに対して現(近)代的思考は、暴力の恐ろしさに無知であると同時に鈍感であるから、宗教の本質的機能を察知することができず、宗教を幻想やら想像力やらに還元してしまう。そして、暴力を適度にあげき出しながら、新たな神話を作ることで満足する。フロイトの精神分析、レヴィ＝ストロースの構造主義はその新たな形式である(第七章「フロイトとエディプス・コンプレックス」、第八章「『トーテムとタブー』と近親相姦の禁止」第九章「レヴィ＝ストロースと構造主義と婚姻の規則」)。宗教的思考と現代的思考に共通する無知(誤認)が、広い意味での宗教的なものの本質的性格である超越性を形づくる。現代という慢性的な供犠の危機の中で、悲劇的な知によって、今はじめて暴力と供犠、そして宗教的なものの本質が正面から見定められようとしている。

本書の功績が、相互的暴力から満場一致の暴力への転換という供犠的なもののメカニズムの解明にあるのは確かなところであろう。これが、宗教の核心の少なくとも一部をついているのは確かだ、と私は思う。宗教を社会統合と結びつけたデュルケムや、宗教と暴力の一原型

である世代間葛藤とを結びつけ、原初の父殺しを想定したフロイトの宗教論がもっている説明力が新たな形でよみがえったという印象を受けた。本書は宗教に対する最高度の畏敬と啓蒙的な解明の精神がびたりと一致した、稀有の「科学的」書物といえるかもしれない。

ただし、著者の論旨に納得しがたい点が少なからずあるのも事実である。個々の論点は別として、全体が汎暴力＝汎供犠説とでもいうべきものに貫かれているという点に一言しておきたい。暴力が差異を消滅させるものであるのは確かであるとしても、差異が暴力の超克からのみ生じるというのは極端である。また、欲望が暴力に支配されることがあるとしても、欲望が暴力をしのぐことが多いのも事実であろう。すべての文化や宗教的現象を暴力＝供犠に還元するのは、やはり無理である。これらはレヴィ＝ストロースやフロイトの立場から予想される反論である。宗教論として見ると、聖なるものがひたすら暴力、すなわち人間の「内なる」力の外在化だという点に疑問が生じる。たとえば、死は聖なるものと深い関わりがあるが、死をもたらすのは暴力であるとは限らず、何よりもまず「外なる」自然の力である。聖なるものは「外なる」力＝自然力の表徴でもあるのではなからうか。ここでわれわれは、著者がクリスチャンであることを思い出し、キリスト教が悪を何よりも人間の罪のなかに見ようとする宗教であることを、指摘することもできよう。本書は現代における原罪理論といえるかもしれない。

著者はアメリカの大学でフランス文学を教えているが、フランス生まれであり、主な著作はフランス語で書かれている。本書の原著はすでに1972年に刊行されており、著者はその後、本書の続篇ともいえるべき『世の初めから隠されていること』(1978)、『贖罪のやぎ』(1982)の二著を世に問うている。なお、作田啓一『個人主義の運命』(岩波新書)には、ジラルルの前著『欲望の現象学——ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実——』(邦訳、法大出版局刊)のすぐれた紹介が含まれている。